時代の栞
TOKI NO SHIORI

「サンタクロースっているんでしょうか？」1977年刊 ◀◀見えぬものの大切さ

子どもに示した 確かな「存在」

世界保健機関（WHO）の感染症の専門家が今月半ば、記者会見で「サンタクロースは新型コロナウイルスに対する免疫がある」と語り、話題になった。「ほっこりする、いいニュース」と捉えた人は多いようだ。だが、そもそもサンタは「存在」するのか。

実話を元に書かれた米国の本『サンタクロースっているんでしょうか？』（1934年刊行）は、それを考える手引書として、大人にも子どもにも親しまれてきた。日本では77年に出版され、2020年には124刷、80万部に達しているロングセラーだ。

今から120年以上前の1897年。バージニア・オハンロンという8歳の少女が、父親からのアドバイスを受けて、地元紙「ニューヨーク・サン」に、「サンタクロースって、ほんとうに、いるんでしょうか？」と投稿した。それに対して、フランシス・P・チャーチというベテラン記者が社説で答えた。

サンタクロースっているんでしょうか？（偕成社、1977年初版）

「サンタクロースをみた人は、いません。けれども、それは、サンタクロースがいないというしょうめいにはならないのです」

「この世の中に、愛や、人へのおもいやりや、まごころがあるのとおなじように、サンタクロースもたしかにいるのです」

この社説は、サンタの由来の「定番」である、貧しい家の子どもに施しをした聖人ニコラスや、キリスト教の神を論拠とせず、サンタを、愛や思いやりや真心と並列のものとして捉えている。

サンタの友だち　バージニア（偕成社、1994年初版）

邦訳と出版に携わった翻訳家の中村妙子さんは1977年、新聞の取材に、「こどもの質問だからとちゃかしたり、また単に夢をもっていればいいのだと甘やかすのではなく、ここには、目にみえない心の問題がどんなに大切かを訴えたチャーチの考えがうかがえます」と語っていた。

朝日新聞もサンタをめぐる教育論を繰り返し報じてきたが、73年の寄稿で、児童文学者の松岡享子さんが訴えたことは、チャーチや中村さんの考え方に通じる部分がある。

「本当らしく見せかけることによってつくられる本当と、本当だと信じることによって生まれる本当を、子どもはそれなりに区別している。むしろ、見えないものを信じることを恥じ、サンタクロースの話をするのは、子どもをだますことだというふうに考えるおとなが、子どもの心のふしぎの住むべき空間を、信じる能力を、つぶしているのではないだろうか」

『サンタクロースっているんでしょうか？』は版を重ね、バージニアの人生や社説の原文について、問い合わせが出版元の偕成社に相次いだ。そこで94年、それらを解説した続編『サンタの友だち　バージニア』を刊行した。

バージニアは大学卒業後、教員となり、妊娠中に夫と別れ、働きながら娘を育てた。社説が絵本として出版されると、その本に寄せた文章の中でこう述べた。サンタの存在を疑う子どもは、サンタへの手紙が届かないから、信じることができないのだ。そういう子どもを一緒に見つけ出して、手紙を届けてあげよう、と。彼女は晩年まで教壇に立ち、71年に81歳で亡くなった。

娘や孫、教え子を取材し、続編を記した村上ゆみ子さん（69）は、「バージニアは病気の子や貧しい子を気にかけていた。クリスマスを『もらう日』より『与える日』に、と訴え続けた」と話す。

「サンタは無償の愛を与える存在。子どもがその夢からさめる時、寂しさが襲う。けれど、今度は『誰かに与えられる自分』という夢へ、少しずつ、階段を上り始める」

コロナ禍の困窮で、プレゼントを子どもに買ってあげられない親たち。過酷な環境で働き続ける医療従事者。困難に直面する人々が支援を求めている。サンタと愛と思いやりと真心。「目に見えないけれど大切なこと」を口先で語り、夢想するのはたやすい。あなたはそれを行動に移し、他人に目に見える形で与えられる「大人」ですか？　バージニアに、そう問われている気がする。

（寺下真理加）

■本の内容　19世紀末に書かれた米国の新聞の社説を元にした本。『クリスマス物語集』（1979年刊、偕成社）の出版を準備していた翻訳家の中村妙子さんが、うち1編だった本作を77年に先行して出版した。画家の東逸子さんの幻想的な挿絵でも多くの支持を集める。

イルミネーションで彩られた仮設校舎に登場したサンタクロース＝2012年12月、福島県南相馬市

■朝日新聞が報じたサンタクロース

1906年　クリスマスを楽しむ一般家庭があることを紹介する記事に「サンタクロース」登場
31年　サンタクロースは貧しい家の3人の娘に贈りものをした「聖僧ニコラス」に由来、と解説
32年　クリスマス「我国でも今や全く年中行事に」
46年　進駐軍「仮装ジープ・バンドで大行進」
51年　記者コラム「ニコラスの嘆き」で「飲んだり、踊ったりするだけがクリスマスでない」
73年　児童文学者・松岡享子さんの寄稿
77年　『サンタクロースっているんでしょうか？』日本で出版。天声人語が紹介
87年　「北欧のサンタ大忙し　日本から手紙がいっぱい」。翌88年、「フィンランド政府公認のサンタクロースが来日」
91年　米国の倫理学教授がチャーチの社説がサンタを社会制度的に定着させたとし、「うそは道徳的に正当化できない」と主張したとの記事
94年　『サンタの友だち　バージニア』出版。天声人語が紹介

プレゼント配送のサンタクロース50人が出陣式＝1985年12月、東京・渋谷の東急百貨店本店

1917年、大阪府西成郡豊崎町（現・大阪市北区豊崎）の梅花女学校で開かれたクリスマス祝賀会

世界の善への信頼 見える社説

国際基督教大学教授
森本 あんりさん（64）

アメリカで「そうだよヴァージニア」と言うと、誰もがすぐに「サンタはいるんだよ」と続きを返してくるほど有名な記事だが、読者が暖かい気持ちに包まれるのは、文面のゆえだけではない。

彼女の家では、歴史的事件から単語の発音まで、わからないことがあると何でも投書して尋ねるのが常だったという。新聞が言うことなら絶対に間違いはない。ニュースメディアがそれほどに厚い信頼を受けていた時代なのである。

少女は「サンタなんかいない」と言う子がいる理由も悟っていた。自分は何不自由ない暖かな暮らしだが、プレゼントなどもらえない子もいるのだ。19世紀末のニューヨークなら貧富の差は歴然としていただろう。それでもまだ、彼らは同じ地域に住んで言葉を交わす友達だったのである。格差も今日ほど残酷な分断ではなかった。

南北戦争の悲惨さを伝えて記者になったチャーチは、迷信を排する冷徹な皮肉屋だったという。おそらく、日頃の自分自身に向かって書いたのだろう。そういう彼の内心の声を社説に据えて正面から世に問うたところに、世界の善を信じるこの新聞の矜持が見える。

この社説が今も人々の心を捉えるのは、こうした社会システム全体の正統性が信頼されているからである。フェイクニュースは目に見える事実だけを提示してもなくならない。フェイクは受け取る心の側に起因するからだ。（寄稿）

◇次回は『きょうの料理』の予定です。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。